

## ◆ 第16回 乳牛の飼育は大変ですね！

搾乳牛の生産費を考えるため、社団法人岩手県畜産協会の資料(2005年12月号)を拝借致します。

家族労働報酬は、乳牛1頭当たり約12・6万円(前年比69%)、生乳価額は約61万円/年・頭です。しかし、飼養者が高齢化し離農者が増え、過疎化に拍車がかかっていると付記されております。

農耕地、家畜の飼育施設の整備と、食料自給率の確保が必要と感じました(どんな組織が、音頭を取るべきですか?)。

酪農経営が多頭化し、新しい技術が導入されております(例えば、搾乳方法については手搾り→バケットミルク→パイプラインミルク→ミルクパーラ→ロボット搾乳など)。

経済的な面でも、世界の状況が目まぐるしく変化の中で翻弄(ほんろう)されております(例えば、石油エネルギーの価格と物価の変動。天候に左右される飼料作物の作況と価格など)。

酪農には、世界の経済と経営の能力が求められております。

ささやかな経営努力のため、紙と鉛筆を用意して下さい。非常に簡単な受胎率の判断と、どうすれば受胎率が上げられるかを考える方法です(図1)。

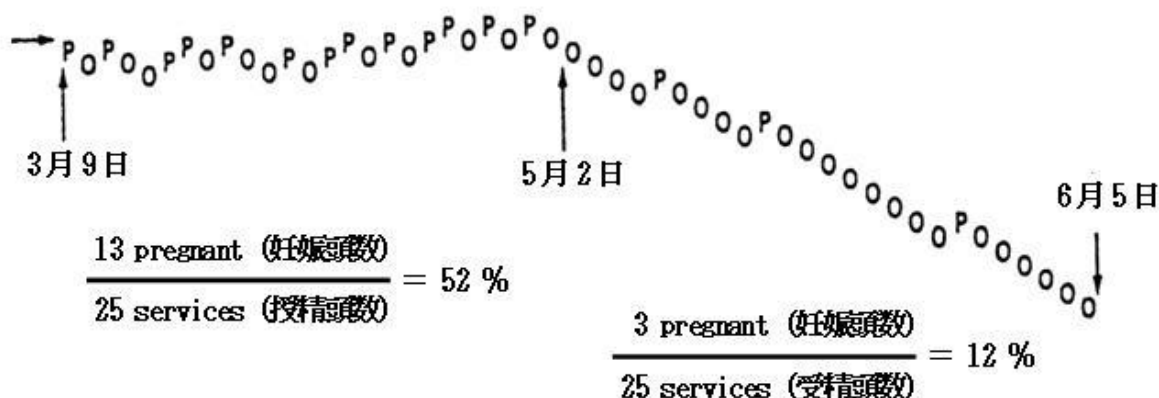


図1：簡単な受胎率の予測 (Rawson, 1988)

→が開始点。紙の左端、真中から開始する。人工授精を行ない、妊娠と判定された牛は、右上に上げてPと記す。不受胎の牛は、右下に下げてOを記す。この例では、3月9日に開始し、2頭目は不受胎で右下にOを一マス下げる。次の3頭目は妊娠でPを一マス上げる。このようにしていくと、5月2日までの成績では受胎率52%ととなるが、5月2日の位置は開始点と同じ高さである事で、計算しなくとも約50%前後と判断もできる。

この例は、帯広畜産大学家畜臨床繁殖学教室が行なっている附属農場での成績です。

毎年5月から、経験の少ない5年生が中心となり発情鑑定・授精時期の判定・凍結精液の取り扱いなどを行なうため、このように、受胎率が低くなった時点で、季節・雄牛・農家・授精師など、いろいろな項目についてその原因を解析できます(コンピューターソフトが市販されています)。夜なべ仕事に、打ち出の小づちを振ってみませんか！